宮本百合子論

沼沢和子

「伸子」との出会いから30年、宮本百合子の文学とひたむきに取り組んできた著者の初めての論集。

人間、仕事、生活、自然などのキー・ワードを手がかりとした最新の「伸子」論を中心に、百合子と親たち、「白樺」派、そして夫顕治との関係性を追究する諸論を配した。

宮本百合子論

沼沢和子

〈著者略歴〉

沼沢和子（ぬまざわ かずこ）
1938年、山形市に生まれる。
1971年、東京教育大学大学院文学研究科博士課程修了。
現在、山形女子短期大学、福島大学非常勤講師。

〈主要論文〉

「宮本百合子」（吉田精一編『日本女流文学史近世近代篇』同文書院、1969）
「宮本百合子 —戦後出発の時期の問題—」（『日本文学』1977.12）
「『貧しき人々の群』論」（『吉田精一博士古稀記念 日本の近代文学』角川書店 1979）
「中期短編作品の問題」（『一冊の講座 志賀直哉』有精堂、1982）
「宮本百合子の評論 —『近代文学』派との接点—」（『日本近代文学』第30集、1983）
「佐多稲子・『哀れ』」（『短編 女流文学 近代』桜楓社、1987）
「『妻よねむれ』論」（『近代の文学』河出書房新社、1993）

現住所 —— 〒990 山形市あかねケ丘2－13－19
電話 0236－43－8564

宮本百合子論
一九九三年一〇月三〇日 初版第一刷発行

著者 —— 沼沢和子
発行者 —— 福田信夫
発行所 —— 武蔵野書房
国分寺市本多二—九—八
電話 〇四二三—二六—〇二〇一／郵便番号一八五
FAX 〇四二三—二五—八八六二
郵便振替・東京 八—九一一二九

版下作成／風鈴堂
印刷／ミツワ印刷 製本／三水舎
装幀／杉澤清司

不良本は送料小社負担でお取り換えいたします。
定価 二、四〇〇円（本体価格二、三三〇円）

宮本百合子論

はじめに

私にとっての〝一冊の本〟、それは「伸子」である。

二十代の初めに、私は「伸子」に出会った。女も人間として豊かに充実した人生を送り成長し続けたい、という願いを目ざめさせ、そのためには、女もライフ・ワークとするに足る仕事をもたなければならない、と自覚させてくれたのはこの本である。

一九六〇年代の大学に学生として身を置き、百合子文学を研究対象に選んでから今日まで、三十年の歳月が過ぎ去った。その間、定職に就くことも遂になく、結婚、出産、育児、老いた両親の世話、と続く女の人生の波をくぐりつつ、日常生活に流されようとする自分を、辛うじて「読み、そして、書く」仕事によって統括できたのは、「伸子」との出会いが私の内に生き続けていたからだと思っている。

この「伸子」との出会いは、当然、私の「伸子」論に反映している。「伸子論」の前提として、百合子が「仕事」についての考え方のある面を「白樺」派の作家達から継承したことも、私の関心の対象となった。

本書は、これまでに発表した論文の中から、「伸子」論を中心に選び出し、編成したものである。Ⅰは百合子と両親の関係、Ⅱは「白樺」派との関係を明らかにしようとしたものであり、Ⅲが「伸子」論である。Ⅳは、時期的には百合子の昭和十年代を扱っているが、「『その年』の位置」は百合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子と夫の両親の関係にふれていて、私の気持の中ではIの「百合子と両親」と対になっており、「宮本百合子の十二年」は、百合子と夫顕治との往復書簡をフェミニズムの視点で眺めてみたものなので、収録することにした。

私の大学院時代、百合子文学についての研究発表は、学界でもごくまれにしか見られなくなっていた。一九七〇年代に入って、本格的な評伝が相次いでまとめられ、「伸子」時代の日記や湯浅芳子宛書簡が公開され、続いて新日本出版社から全三十巻の新全集刊行が開始された。本書に収めた論のほとんどは、新資料が次々に公開され、百合子文学の全貌が現れてくる喜びの中で書きつがれた。したがって、方法的には手さぐりの状態であり、内容に重複するところも多少あるが、敢えてほぼ原型のまま収録した。

近年は、フェミニズム批評の導入にともない、女性が人間的成長と自立を求める「伸子」の物語が再評価されつつある。書き下ろしを含む私の四篇の「伸子」論も、フェミニズム批評に大きく学ぶところがあった。ただ、私は、一つの批評理論で作品を切ることはしたくなく、フェミニズムを始めとするいくつかの理論を吸収し、「伸子」をとりまくさまざまな時代的、社会的、文学的情報をできる限り視野に入れた一読者として、「伸子」のテクストに向きあうよう努めた。そうすることによって、私自身、「伸子」という作品を豊かにふくらませる読書の喜びを堪能することができたと思っている。拙い論ではあるが、現代の読者が、この近代文学の古典を新たな光の下で読み直す一契機として下されば幸いである。

〈目　次〉

Ⅰ
百合子と両親……8
「古き小画」論……44

Ⅱ
「白樺」派と宮本百合子……84
伸子と「暗夜行路」……122

Ⅲ
『「伸子」時代の日記に』について……172
「伸子」成立前後――『百合子の手紙』覚え書き――……193
「伸子」論……213
一、伸子と佃の出会い……213

二、伸子のプロポーズ……232
三、母からの自立……255
四、〈生活〉〈自然〉というキーワード……278

Ⅳ

「その年」の位置……318
宮本百合子の十二年……341
あとがき……361

I

百合子と両親

「古き小画」論

百合子と両親

一

宮本百合子の主要な作品には、しばしば両親およびその家が描かれている。自伝的長篇「伸子」「二つの庭」「道標」の佐々泰造と多計代のモデルは、百合子の父母、中條精一郎と葭江であり、動坂の家は、すなわち百合子の生家の林町の家である。

先行批評の中で、作家論的視角から百合子と両親およびその家との関係に言及した例は、たとえば次のようなものである。

宮本百合子の物質的基礎は、イギリスふうのいいかたを借りれば「上層中産階級」(upper middle-class)、それも上昇期という限定を必要とする。(中略)明治末期から第一次世界大戦にかけての何年かは、宮本百合子の家庭にとって明るい繁栄期ではなかったろうか。(中略)大正時代のブームにめぐりあいながら、技術家であったということは幸運であった。そのために中条百合子の父・中条精一郎は、急激に財貨を増殖した人たちの腐敗や堕落から離れていることができた。(中略)中条百合子は、十代の少女時代から「道標」を書きあげるまで持続した粘り強い向日精神を広く、深く養うことができたであろう。(荒正人「伸子と真知子」『市民文学論』一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九五五年）

宮本百合子の文学の成立する場所には、「暗夜行路」に学ぶ学ばぬにかかわらず、志賀直哉に似た性格がある。その一つは強い肉親愛である。それを暗黙に前提した上での親子の烈しい対立葛藤である。（中略）百合子と母親の関係は、「和解」その他に見られる志賀直哉と父親との関係を彷彿させつつ、それよりなお濃密なものがあり、母親は彼女の文学にとって永きにわたって重要な主題であった。（本多秋五「解説」『日本の文学・宮本百合子』一九六九年　中央公論社）

この精一郎と、波瀾にとんだ生活経験を重ねた百合子の父娘が、その生涯の間に一度も理屈っぽい話をしたことがないのも面白い。（中略）百合子の生い立ちを考えるとき、この父娘の愛情はみのがすことのできないものだろう。（中略）宮本百合子が二十世紀前半のすぐれた進歩的文学者として花咲く過程には、矛盾をはらんだ葭江という土壌のあったことも見落せないことだろう。（大森寿恵子『早春の巣立ち』一九七七年　新日本出版社）

これらはすべて首肯すべき貴重な意見である。私はこれらを踏まえた上で、最近新たに公表された百合子の日記や手紙を参照しつつ、さらに考察を深めてみようと思う。

二

百合子の初期に「火のついた踵」（一九二二年）という短篇戯曲がある。三十歳の統計学者である夫を熱愛している（と自分では信じている）十八歳の若妻が、訪ねて来た男友達との仲を夫に疑われ

る話である。妻は、あらぬ疑いをかけられ必死に弁解するが、聞き入れてもらえない。ドラマは「私はどうすればいいの？――人間は、言葉でほか、自分の心が表わせない。（烈しい歔歔）その言葉を信じられない時」云々という絶望的な科白で幕となっている。

この戯曲は「伸子」執筆開始の二年前、荒木茂との結婚三年目に書かれた。すでに〈泥沼時代〉に入っていた結婚生活の悩みがモチーフになっていると見られ、「我に叛く」（一九二一年）、「心の河」（一九二四年）とともに、「伸子」の序曲ともいうべき系列に属する作品である。

それはともかく、私が今注意をひかれるのは、ここで作者が女主人公の科白を借りて言葉の無力を痛感していることである。裏を返せば、結婚生活で言葉の無力に直面するまでは、自分の心を表現し、他者との意思疎通をはかる手段としての言葉を信じていた、ということではないか。百合子の場合、そういう言葉への信頼は、少女期からの旺盛な読書によるだけでなく、彼女の成育環境、中でも母親との関係によって培われるところがあったのではないか。そう推察するゆえんは、たとえば「伸子」に描かれた母娘が実によく〈議論〉することである。

周知のように、「伸子」は自伝的作品であり、日記その他に照らしてみても、結末部分を除けばほぼ事実に忠実に書かれたと見られる。（もちろん、取捨選択は大きくなされているが。）伸子と多計代の母娘関係も、百合子と葭江のそれをそっくり反映している、といってよいだろう。

アメリカ留学中に結婚した長女の伸子の帰国を迎えて、多計代は些細なきっかけをつかまえては〈議論〉をふきかける。伸子が「今度のことは私、遊びではないの。万一、母様と私との意見が違っ

ても、私の決心は変らないの。だからできるだけ解り合いましょうね」と、了解を得るべく努めるのに対し、多計代は、娘が自分だけの判断で行動したことへの不満と、貧しく社会的背景も持たぬ娘婿佃への疑惑から、感情的に言い募りがちである。話が激してくるのに困惑した伸子が「こういう風に話すのはやめましょうよ」と言えば、「お前も変わったね—もとは決してこうではなかった。お互いにどこまでも意見を交換するだけの真心と純粋さを持っていた。それがお前の身上だった。誰の感化だか知らないが、新しい態度だね……」（傍点引用者）と挑発する。〈熾烈な、対手を容赦しない性格〉の多計代は、いつも最後には伸子をむきにさせ、伸子も〈母同様、屈しない激しい生れつき〉をあらわす。かくて彼女らの間には、〈議論〉が絶えないということになり、各々の論理をぶつけあう激しさに、傍の小さい弟妹は一人立ち二人立ちして去り、〈より情熱的でない、平和的な〉父は心から嘆息する、という情景が現出するのである。しかしとにかく、母娘がお互いにどこまでも意見を交換する習慣をもち、とくに母親が感情だけでなくそれなりの論理をもって娘に〈議論〉をふきかけ、娘は全力をあげて受けとめ言葉を尽すという光景は、当時の日本の家庭では勿論、現代でもそうありふれたものではないだろう。

ここで私は、たとえば、中野重治の「村の家」や「むらぎも」に寸描された主人公の母親の姿を思い出す。東京帝国大学生の息子が帰省すると「あっ、帰んなったか……」と囲炉裏端から立ってくるあの母親は、〈どんなことでも少しの言葉でしか話さない。単語というものを少ししか持っていない〉（「むらぎも」）女であり、転向出獄して帰宅した息子と対峙しようとする父親から、話が分か

らず混乱するという理由で席をはずすよう命ぜられる〈「村の家」〉のであった。主婦として家庭に君臨する「伸子」および「二つの庭」「道標」の多計代となんたる相違だろう。いや、「村の家」や「むらぎも」の母親の方が日本近代の庶民の間では圧倒的に多かったのであり、多計代のように強烈な個性をもって光彩陸離たる母親像の方が少数派なのだろうと思う。

百合子は一九三四年、母が亡くなって一月余の時点で、「母」というエッセイを書いている。亡くなって間もないのに、よくここまで情理を尽し、広い視野のもとに母の一生を概括することができたと感嘆せざるを得ない秀れた追悼の記である。その終わり近くには、こう書かれている。

母の一生は女ながらいかにも活々と、多彩に、明治八年頃から今日に至る略六十年の間に日本の中流の経験した経済的な条件、精神的な推移の歴史を反映している。母はめずらしく強烈な性格の女性であり、人間としての規模も小さくなかった。母の属した社会の羈絆がそれを圧しつけて萎えさせたり、歪めたりさえしなかったら、鍛練を経て花咲くべき才能を持っていたと思う。／母は、今の世の中のしきたりにおとなしく屈従して暮らすには強く、しかし強く社会的に何事かを貫徹して生きるためにはまだ弱かった。

明治の高名な倫理学者西村茂樹の娘であり、年経るにつれて強烈で矛盾をはらんだ性格を発揮するようになったこの母に対して、百合子は、成人し、自分の選んだ人生コースを進むにつれ、厳しい批判の目を向けた。しかし、批判の陰に、強い骨肉の愛と女同士の共感が常にあることを見逃してはならない。「伸子」に描かれた母娘の〈議論〉にしても、その根底にあるのは強烈な肉親愛であ

る。ただ、互いに深く愛しあいながら、各々の生きる論理を譲ろうとしないところに、この母娘の〈議論〉の熾烈さも独特さもある。「伸子」には、伸子にとって母がどのような存在だったかを集約的に述べた個所がある。

彼女は少女時代から、母とは普通の親娘とは違う情熱で結ばれて来た。互いに強い愛と憎とを持ちつづけてきた。母は女性として、伸子にとって、ある時は全き母であり、ある時は友達であり、ある時には競争者であった。とにかく、母は伸子に向かって、存在のあらゆる角度を、生のまま強烈に打ちつけて生きてきたのであった。伸子にとっても、母は全力を要する生存の対照であった――自分と母との性格の差を自覚し、生活態度を批判し、一言で言えば、彼女の模型でない一女性としての自分を形造ってゆくためには、伸子は、生半可の力を費したのではない。普通、娘が母親に抱く懐かしさ、休安と、正反対の生活燃焼の、異様な閃光が二人の間にあった。（三の十一）

同じ母娘関係でも、比較的年齢差の少ない長女と母親の間などによく見られる現象であるが（伸子と多計代ほど熾烈な関係ではないにせよ）、伸子にとって母は単に母であるにとどまらず、もっとも身近に存在した女性の原型だったわけである。それがまさに肉体を具えた原型だったことをよく示す記述が「伸子」の『改造』連載稿の方にある（単行本にするに際して削除された）。伸子が佃との結婚を考える場面である。

母が女性として背負っている分娩の任務、子供に対する責任の重さは、十代の伸子に恐怖を

抱かせた。「結婚すれば自分はあの恐ろしい目をして、更に恐ろしい母親とならなければならないだろう」。伸子は、両親が自分達の教育について意見が合はず論争したあげく、いつも母が涙をこぼしながら訴える言葉を到底忘れることができなかった。「よくお考へになつて下さい。貴方は二言目には私の教育が悪いと仰云るけれども、子供達は私ばかりの子ではありません。皆が佐々家の遺伝を持つて居ります。それはどうしたら好いのです？　私は母親だからと云つて不可抗な其那もの丶責任まで負はさうとするのは、あんまり酷ぢやありませんか。好きで嫁に来たのでもないのに！」（「揺れる樹々」）

このようにして、分娩と育児という女に負わされた最大の任務に対する恐怖感が、少女の伸子の心に刻みこまれたのであった。「好きで嫁に来たのでもないのに！」という言葉とともに。やり場のない恨みと嘆きをこめたこの一言を胸に抱いたまま、現に妻として母として暮している気性の激しい母親が、長女に対して〈存在のあらゆる角度を、生のまま、強烈に打ちつけて生きて来た〉のは、実にあり得べきことであった。満たされない望みを娘にかけて、自分の思いどおりに仕立てようとするのもまた、あり得べきことであった。娘の側からいえば、子として親を慕う自然な情の他に、もの心つくにつれ、同じ女としての肉体をもち、女であるがゆえの不如意な人生をあてがわれた母への強い同情が育ったであろう。その一方では、母というより年上の女として不可解な激情をぶつけてくるのを受けとめかねる思いも重ねたであろう。そして、母に対する濃い愛情とともに、母の人生の轍を踏むまいとする決意を秘かに抱くようになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com